柿の花

若い時分から、停年退職したら、時分の食い扶持を自分で賄いながら家内と一緒に田舎で晴耕雨読の日々を過ごしたいと思っていましたが、まだ停年まで少し間があるこの時期に、知人の紹介で和歌山県紀の川市に移り住むことになりました。この地は、かつらぎ山系と龍門山系の間の紀の川の河岸段丘で、みかん、桃そして柿の産地で新しい自宅はそれらの畑の真ん中に位置しています。朝早く紀の川からたち登る霧がたなびき、霧が晴れるのを待つ様に 10 機を下らないハングライダーがゆっくりと舞う久しく忘れていた自然の美しさを満喫している。春先には、桃の花であたりがピンクに染まり、5 月になるとみかんの白い花がさわやかな香りとともにあたりを包み込むようになった。田舎の時計は、都会の時計より 2 時間は早く進むようで、朝 7 時には回覧板が回ってくる。当初は、そのペースになかなか乗れなかったけれど、最近は、 5 時には起きだして、コーヒーをいれ、山鳩の声を聞きながら川霧を楽しむことができるようになった。うれしいことである。

購入した古農家には、相当広い畑がついており、そこに立派な柿の木が 50 本ほど植わっていた。その土地は、最低 5 年間は農業にいそしむという約束をして入手したが、私自身は、これほど多くの柿の木の世話は経験が無いが、折角、譲り受けた美しい柿畑を荒らして周囲に迷惑がおよぶのを恐れて、農業協同組合を通じて農業指導員の教えを乞いながら世話を始めた。しかし、 3 月の芽吹きから 11 月の収穫までの農業暦を読むと、抜枝、芽摘み、摘実、消毒、草刈りなど本当に多くの作業が必要である。消毒だけでも 10 回を超える。そのために様々な農機具を準備せねばならない。頭を抱えているとひょんなことで知り合った無農薬農業に燃えている若い農業者が全面的に世話を引き受けてくれることとなった。私は、彼に教えを乞いながら 2 本の柿の木の世話をすることとなっている。写真は柿の花であるがみかんや桃のように自分を主張すること無く緑の葉に隠れるように咲く薄黄色の楚々とした花である。

農作業の傍ら彼らから農業が抱える問題を聞いた。この辺りの柿は、品質が良くて市場でも好評で 1kg の柿は 200 円程度で出荷できるというが、それでも出荷するために投入する労力と経費はまったく回収が期待できない。ただただ私より一回りは歳が高いおじいさんやおばあさんが「おいしい柿を作って食べてもらうのが楽しみ」といって楽しみながら農作業をやっておられる。そして、農作業ができなくなると農地は放棄される。